

から帰国するのも、現場でケガして病院から帰るのも同じだと思います。今も足首、ひざ、腰と痛み、歩くのもままなりません。何とかよろしくお願ひいたします。

シベリア抑留の思い出

熊本県 古家 次男

私の家は貧しい農家で、父は熊本県山鹿市三岳の出身、母は同市平小城の出身。結婚して長男が生まれると家計もますます苦しくなり、姑との仲もよくなかったようで、福岡県大牟田市へ出稼ぎに出た。大牟田市加納町の借家に住みつき、父は三池製作所に就職しました。

大正十二（一九二三）年十月三十一日、ここで私は古家の二男として生まれました。（その後、弟四人が生まれ、男ばかりの六人兄弟、一家八人の大家族となる）

私は昭和十一（一九三六）年、大牟田市第九尋常小学校を卒業し、昭和十三年、大牟田市三川高等小学校を卒業する。同年四月、日本発送電株式会社に入社。ボイラーの補修作業員として勤務。一年で退職（友達が福岡市堅粕で電気溶接の工場にいたので、そこにお世話になる）。電気溶接の見習工として二年間勉強する。

昭和十七年十月、再度日本発送電に溶接工として工作係に入社する。会社には当時青年学校があり、勤務しながらの通学だった。軍事教練が主であった。

十代の青春もつかの間に過ぎ去り、二十歳の徴兵検査の年齢になっていた。

昭和十八年に大牟田市の市民会館で行われた徴兵検査に臨んだ。市民会館は若者でいっぱいである。検査の結果は「甲種」「第一乙種」「丙種」などにランクされ、兵役に適さない者は「丁種」とされる。甲種合格は男の名誉であり、あこがれであった。順番が来て徴兵官の前へ行った。すると

徴兵官は大声で「第一乙種合格」と叫んだ。私は直立不動で「第一乙種合格」と復唱した。頭の中は真っ白だった。これで現役兵で入隊することになる。その翌年、私は昭和十九年の春、母が作ってくれた千人針の胴巻と「武運長久」と書いた寄せ書きの日の丸の旗を持って、歓呼の聲に送られて大牟田駅に向かった。もう数人の出征兵の方が来ておられた。一緒に汽車に乗り、その日に久留米の四八連隊に入隊する。

兵器、軍服等を渡され、班の編成等があり、その間一週間、家族との別れの面会等があつて、南方行きと満州行きに分けられ、私は満州の関東軍として東寧というソ満国境警備兵三〇六部隊第二中隊に配属となった。ここで初年兵の苛酷な教育があり、太平洋戦争はこのころよりにわかに攻守逆転になっていたと思われる。昭和十九年九月末ごろ、三〇六部隊は全員南方派遣となる。その後不明。なぜか私は二中隊よりただ一人、ハルピンのミルレル兵営に転属の命を受けた。

ここはハルピン駅前より真東へ一キロメートルくらい緩やかな坂道を登った所に細長い兵舎が一棟あり、前は広い空き地になっていた。ここに面識のない顔ばかり三十人くらい集まっていた。すると特務機関の人が来て、班の編成が始まった。それは諜報、謀略、宣伝に分けられ、私は謀略班であった。軍服、階級等なし。皆、私服着用。特務機関の訓練は、良く分からないロシア人街の見学から始まり、映画の見学があり、山登りがあり、遊びと同じであった。謀略活動の訓練はこれからと思っているが、なかなか始まらない。後でわかったが、特務機関員は一年や二年では使い物にはなれない、最低五年以上は必要とのことであった。

八月十五日、重大発表があるから兵舎へ集合とのことであり、戦局の厳しきは分かっていたが、信じがたい終戦の「玉音放送」とのことであった。何が何だか全く分からなかったが、班長の説明があり、日本は降伏したとのこと。その瞬間、

集まっていた約五十人全員茫然となり、座り込んで地に伏し、誰も言葉はありませんでした。

「本日ただいま兵舎は全員解散する、ここは危ない、自由に好きな所に行つて下さい」と言つて、班長はどこへ行かれたか全く分からない。その後会うこともなかった。私はいつも満服を着用していたので軍服に着替え、銃と帯剣を着用、どこかの部隊へ紛れ込むようにした。

その後、中央寺院の前の広場で武装解除との情報があり、早速行つてみると、銃や帯剣が山積みになされている。見知らぬ部隊の後の方からついで行き武装解除を受けた。もう一安心である。野宿一夜、翌朝二百人くらいの元軍人が集結していたのである。これから牡丹江へ集結し日本へダモイだと言われ、ハルピン駅の方へ歩いて連れて行かれ、駅前で合流したほかの集団と一緒になり、長い列となつて牡丹江を目指して本格的な行軍が始まったのである。これも故国へ帰れることを信じて、途中カエルを食い、へびを取つてきては喜ん

で食い、中でも大豆の搾り粕（自動車のタイヤのような物で馬の食糧）、これで生き延びたようなものだった。

牡丹江よりいよいよダモイ、ダモイで、箱型の貨車にすし詰めのように詰め込まれ、家畜同然の扱いで輸送された。（これから先、それぞれの収容所に着くまでは多くの人が書かれているので省略させていただきます）

私が貨車から降ろされたのは五十人くらいの集団だったと思うが、ハバロフスクの小さな村のようだったと思う。ここで降りた者は皆裸にされ、頭は坊主にされ、また脇の下の毛から陰毛まで、毛という毛は女性軍医から剃り取られ、洗面器一杯の水で洗った後、次は噴霧機で白い粉を吹きかけて終わり。動物と同じ扱いである。これから歩いて収容所行きである。収容所は四隅にマンドリン銃を持った歩哨が見張り、鉄条網で囲んである。収容所は皆同じと思うが、日時が過ぎるにつれてノミやシラミに襲われるのである。このノミ

やシラミ退治が大変で、最初は一匹ずつ両手の爪でつぶしていたが、間に合わないので針で串刺しにするのである。一針に二十匹くらい刺し、ペーチカで燃やすのである。

慣れると隣の友人と仕事の話や郷里の話に花が咲き、楽しみもあった。不潔になると下着の縫目や袴下の縫目が彼らの陣地になる。こうしてシラミとの苦闘は毎日続く。いつになったら安心して寝られるだろうと嘆くのである。

ここの収容所は旋盤工や大工さんもおられたようである。また、秋場の馬鈴薯パレイシヨ（カルトーシカ）掘りも盛んであった。私の仕事は電気溶接である。冬は舟の胴体の錆びた鉄板の張り替え作業。表と裏から電気溶接し、油をたらして洩れがなければ完成である。

舟の改修は冬できないのでないのである。冬は舟の周りの氷を幅二メートルくらい取り除き、底を浮かせ枕木を入れて、舟全体を浮かせて作業するのである。溶接作業は体は動かせるが足は動か

せないで親指が凍傷になり、切開した後がいまだに残ったままである。

昭和二十二年十月三十一日、待ちに待った帰還の連絡があった。私の誕生日である。こんなにめでたいことはない。

通訳の説明では、今から発表される者は自分の荷物を持ってラーゲルの出口の所に集合せよと。全く息詰まるような思いで緊張の連続である。

名前を呼ばれた。返事をして、いつも隣に寝ておられた野田さんのところに行つた。「帰つたらすぐ私の家に行つて下さい」と言われ、奥さんの写真を見せられた。「早く元気になって帰つて下さい、日本で会いましょう」と言つて堅い握手をして別れたが、まだ本人と会わない。私達は翌朝ナホトカ港に着いた。日の丸の旗が見える。確かに祖国日本の船である。船腹に「遠州丸」と大きく書いてある。

いよいよ私達の乗船である。揺れるタラップを上り、やっとデッキに足を入れてようやく「助

かった」という実感と嬉しさが体中をかけめぐ
る。笑顔で「ご苦労さん」と声をかけてくれる船
員さん。涙がとまらない私達である。

数年ぶりに懐かしい畳の上で第一夜を明かし、
デッキに出て見た空は日本晴れ。何となく落ち着
かない。船室をあっちへ行ったりこっちへ来た
り、ソワソワしている。誰かの「日本が見え
たぞ」と言う声に遠方を見ると、確かに目に見えて
きた。日本の島影、緑の山々、だんだん鮮明にな
る。また涙が出る。私たちは今、懐かしい祖国日
本の土に第一歩を踏み入れた。

昭和二十二年十一月三日の朝であった。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年十月三十一日 福岡県

大牟田市加納町で出生

学歴 昭和十三年三月 大牟田市三川高

小卒業

入隊前職歴 昭和十三年四月 日本発送電株式

軍歴

会社入社

昭和十八年徴兵検査

昭和十九年四月 久留米市第四八

連隊に入隊。後、北満州第三〇六

部隊編成、満州にて特務機関に転

属

昭和二十年九月 旧ソ連邦ハバロ

フスクに抑留

昭和二十二年十一月 舞鶴に帰

還、復員

帰国後の職歴

昭和二十二年十二月 九州電力株

式会社復職

現在、山鹿市老連常任理事。三五

校区老連会長。全抑協鹿本郡市支

部役員として社会のため活躍。復

員後、九電労組専従四年。

(熊本県 西川 勝)